富山県高岡市

守山城跡範囲確認調査概報Ⅰ

高岡市教育委員会

富山県高岡市

守山城跡範囲確認調査概報Ⅰ

高岡市教育委員会

序

これまでに高岡市域で確認されている城跡は三〇箇所を数え、高岡城や木舟城、そして守山城という県内有数の城館遺跡が市内に所在しています。とりわけ、南北朝期に文献史料に登場する守山城は、越中西部の拠点的な城郭として長く機能しました。また、佐々成政が豊臣秀吉に降伏した天正十三年（一五八五）には、後に加賀藩二代藩主となって高岡の町を開く前田利長が入城しており、その役割の重要性を窺い知ることができます。

さて、高岡市教育委員会では、平成十八年度から前田利長墓所の詳細調査を開始したほか、将来的には高岡城の詳細調査にも取りかかる準備を進めています。そして、守山城についても前田家関連史跡としてその内容を明らかにし、文化財として保護することを目的とする範囲確認調査を開始したところです。

多岐にわたる文化財の中でもお城は地域のシンボルとなるものです。二〇〇九年に高岡開町四百年という節目の年を迎えるにあたり、若くして守山城に入って越中の国作りをすすめ、隠居後は高岡城を築いて城下町を開いた前田利長公に対する市民の関心はより一層の高まりをみせています。本書がそうした気運を支え、守山城に対する理解と関心が深まり、史跡として保護する資料として活用されることになれば幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり調査の実施について多大な御協力を頂きました高岡徹氏をはじめとする関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

平成十九年三月

高岡市教育委員会　教育長　村井　和

目次

序文
Ⅰ　守山城の歴史　……1
一　はじめに　……1
二　戦前からの調査小史　……2
三　文献史料から見た守山城の歴史　……6
Ⅱ　二上山山頂の城郭遺構とその性格　……16
―守山城史の再検討―
Ⅲ　「二上山城跡へ御登山道筋の図」をめぐって　……22
―古図に描かれた守山城跡―
一　はじめに　……22
二　本図作成の経緯　……22
三　斉泰の二上山登山の目的　……23
四　描かれた守山城跡　……23
五　おわりに　……24
あとがき

例言

一　本書は、富山県高岡市守山に所在する守山城跡の範囲確認概報Ⅰである。

二　本書の編集は、高岡市教育委員会文化財課主任栗山雅夫が担当した。

二　調査は、高岡市教育委員会が調査主体となって実施し、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

三　調査は、高岡徹氏の全面的な協力を受けて実施し、本書で報告する原稿としてとりまとめていただいた。

四　現地踏査及び、文献史料調査は高岡徹氏と栗山があたった。このうち、文献史料の写真撮影は栗山が担当し高岡市教育委員会で保管している。

五　本書で使用した写真のうち、一～八は高岡が撮影し、九・十は栗山が撮影したものを使用しており、原版はそれぞれが保管している。

七　調査の実施に際して、次の関係各位の御指導・御協力を得た。記して謝意を表します。
金沢市立玉川図書館近世史料館・富山県立図書館・射水市新湊博物館・高岡市福岡歴史民俗資料館
宇佐美孝・長田和彦・野積正吉・松山充宏・日和祐樹・肥田啓章

Ⅰ　守山城の歴史

一　はじめに

松倉城（現魚津市）・増山城（現砺波市）と並んで「越中三大山城」の一つとされる守山城（現高岡市）は、十四世紀半ばの南北朝期から戦国期を経て、十六世紀末の近世初頭に至るまで使われた城といわれる。この間は約二百五十年の長きにわたり、改修や整備が繰り返されたとみられる。無論、その途中には未使用の時期もあったが、これほど長期にわたって存続した城は、越中国内でも前記の松倉城・増山城など数か所を数えるにすぎない。

このように越中を代表する一大山城ではあるが、実は松倉・増山の二城と比べ、遺構の全容解明が遅れていた。現在訪れる人々のほとんどは、自動車を利用して上がった山頂の本丸跡を城跡と思い込み、研究者などの多くも山上部の万葉ライン（自動車道路）から上にある一連の郭群を城域とみなしてきた。この結果、近年では守山城を「単に峰の上に郭を並べただけの簡単な構造」とする評価が一部で見られるようになった。[1] こうした評価は戦前の推定図（後述）などに記された範囲内での縄張調査から守山城の構造すべてを判断しようとするものであり、本来、広い視野からの地道なアプローチを要する城郭や地域史の研究とは相容れないものである。何よりも城郭が地域に根ざした遺跡であるという視点が置き去りにされている。無論、縄張図から読み取れる部分は大きいが、縄張図がすべてではないことも知っておかねばならない。

本稿では、この守山城の全容解明を目指すにあたり、まず関連する文献史料を整理・検討することにより、二上山塊における城郭の形成と発展を時期的に押さえたいと考える。あわせて、現在の二上山山頂付近で確認し

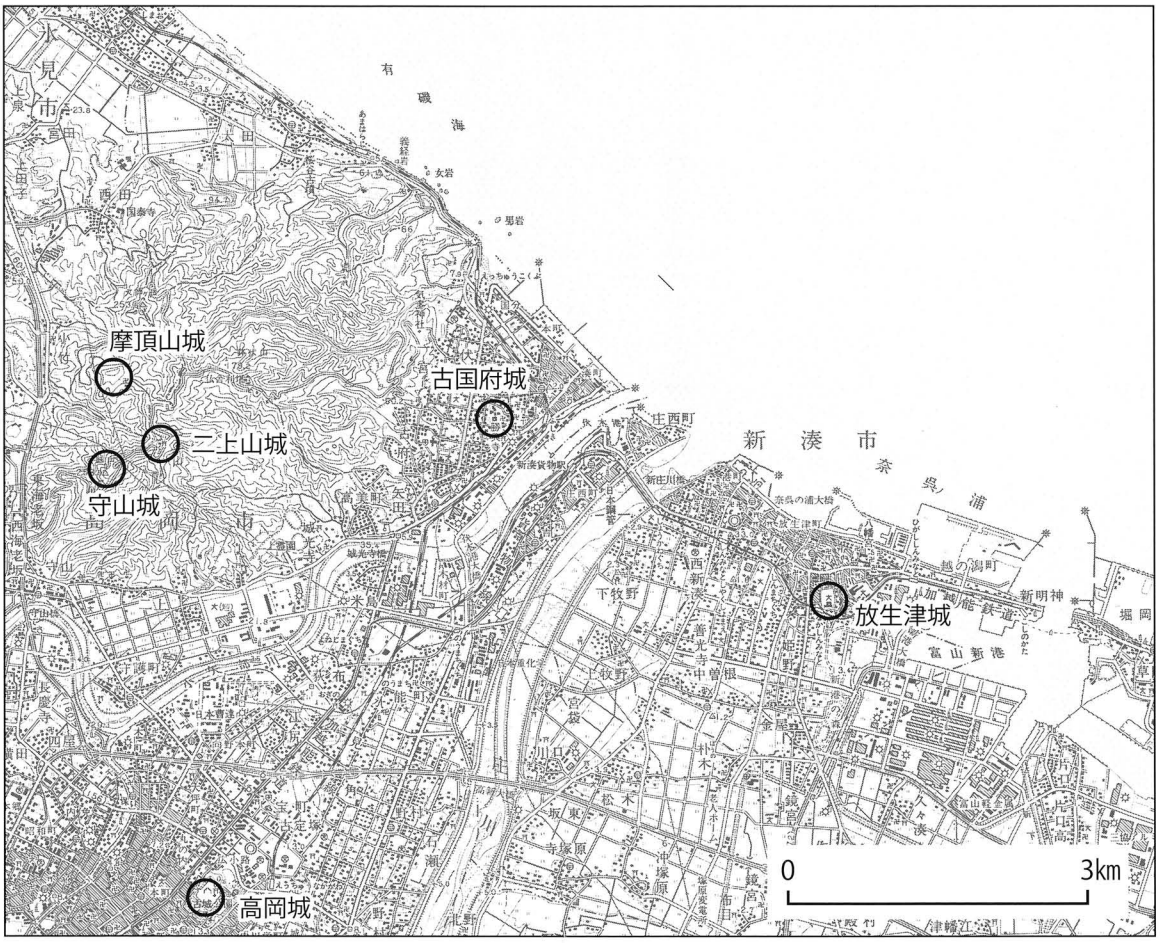

図１　二上山塊と周辺の城館跡

た城郭遺構についても報告し、その性格や守山城史の中での位置づけについて新たな考えを述べたいと思う。

二　戦前からの調査小史

黒板勝美氏の調査

守山城跡が注目されたのは近年のことではない。管見によれば、すでに大正年間より国の史跡調査の対象となっている。すなわち、『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第四号（富山県、大正十二年）所収の「黒板博士随行紀」（以下、「随行紀」と記す）及び「雑録」によれば、大正十一年（一九二二）八月、内務省史蹟名勝天然紀念物調査会委員で文学博士の黒板勝美氏が富山県の史跡調査のため来県し、守山城跡に登っていることが知られる。黒板勝美氏（明治七年～昭和二十一年）は明治から昭和時代前期にかけての国史学者として知られ、文部省関係では国宝保存会、史蹟名勝天然紀念物調査会、重要美術品等調査委員会などの委員となり、文化財の保存に努め、特に史跡保存の根本方針を定めた功績は大きいといわれる。[2]

さて、「随行紀」によれば、黒板氏は同年八月十四日から十六日までの三日間富山県内に滞在し、次の日程で各地を精力的に回り調査すると共に講演会にも臨んでいる。

雑　録

（中　略）

○内務省史蹟名勝天然紀念物調査会委員文学博士　黒板勝美氏

大正十一年八月十四日随員田沢金吾氏[3]と共に来県左の日程に依り史蹟の調査をなし十七日新潟市に出発せらる。

八月十四日　婦負郡古里村羽根山古墳、富山市梅沢町来迎寺〔高岡泊〕

八月十五日　射水守山城阯、同郡二上山射水神社奥院、氷見郡宮田村国泰寺、高岡市瑞龍寺、同前田利長墓、同極楽寺、同古城公園〔氷見町泊〕

八月十六日　氷見郡加納村横穴、同郡宇波村大境洞窟、同郡太田村古墳、射水郡伏木町古国府勝興寺、同一宮国分寺〔高岡泊〕

○富山県史蹟名勝天然紀念物調査会主催講演会

史蹟名勝天然紀念物の保存宣伝として三好、黒板両博士の来県を機とし左記各地に於て講演会を開催し内務省撮影フィルム「青森県蕪島うみねこ繁殖地」「本県ほたるいか群遊地」の活動写真をも映写せしが、各地共聴衆堂に溢れたり。

三好博士講演

（中　略）

黒板博士講演

八月十五日午後二時より　氷見高等女学校に於て

八月十六日午後四時より　高岡実科高等女学校に於て

注目されるのは、この時の調査で古墳や寺院と並び、守山城跡と高岡城跡が調査対象となっていることである。この内、八月十五日の守山城跡調査では、午前四時に高岡の宿を出発、自動車で東海老坂に着き、そこから城跡へ登り、二上山山頂の射水神社奥院、摩頂山の弘源寺（国泰寺旧跡）を経て麓の小竹村に下っている。そこから自動車で高岡に戻り、瑞龍寺・前田利長墓所・極楽寺・高岡城跡を訪れ、さらに午後四時からの講演会をこなし、夕方の汽車で氷見に向かい、同地で宿泊するという、かなりハードな日程だったことが知られる。[4]なお、当日の講演は「随行紀」と「雑録」で会場名に混乱が見られるが、八月十六日付『富山日報』では坂下町小学

校とし、同月九日付『富山日報』予告記事による講演内容は国泰寺・勝興寺・瑞龍寺の古文書什物並びに古城公園に関するものとなっている。

ともかく、この時の黒板氏の史跡調査に守山城跡があげられていることは、大正十一年の時点における当城跡の評価を示すものとして留意しなければならない。なお、参考までに大正年間、本県で国の指定を受けた史跡は現氷見市の朝日貝塚と大境洞窟住居跡の二件で、いずれも黒板氏が来県する五か月前の同年三月八日に指定を受けている[5]。黒板氏は調査の最終日（八月十六日）に大境洞窟と朝日貝塚の両方を見ていることから、この時の来県は、それら二件の指定とも関係があるとみられる。

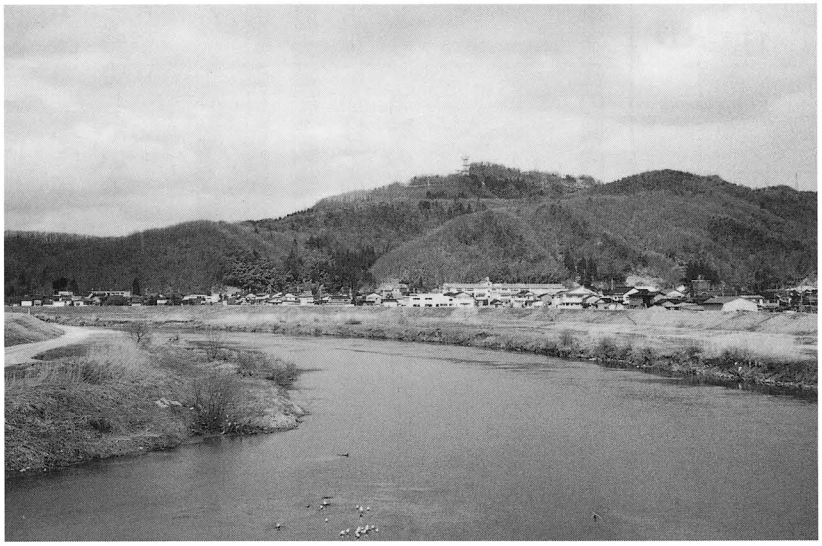

写真１　守山城跡遠景（南方より。手前は小矢部川）

上田三平氏の調査

斎藤忠著『日本考古学史辞典』によれば、昭和二十五年（一九五〇）没。昭和二年（一九二七）内務省の大臣官房地理課嘱託となり、翌年事務が文部省に移管されると、同省で長らく史跡調査の仕事に従事し、全国の史跡指定に関係した人物である。『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第拾参輯（昭和十四年）の「富山県内城阯の調査」中、守山城跡に関する記述には、「又文部省嘱託上田三平氏一昨年此處に到りて富山県内唯一の城阯史蹟の指定補地（マヽ）として推選せられたり」とあって、上田氏が昭和十一年に守山城跡を訪れ、前記のような高い評価を与えていたことが知られる。上田氏が何ゆえ当城跡だけを国指定史跡の候補としてあげたのか、また当時の調査内容の詳細も不明だが、この時点における文部省サイドの一定の評価がうかがえ、興味深い。

石割平造氏の調査

上田氏調査の二年後（昭和十三年）、さらに注目すべき調査が石割平造氏によって行われている。石割氏は当時陸軍省築城本部内の本邦築城史編纂委員会委員で元工兵中佐だった人物である。『日本陸海軍総合事典』によれば、明治三十八年（一九〇五）陸士卒、大正五年（一九一六）陸大卒で近衛師団参謀・参謀本部部員・広島湾要塞参謀などを務めたあと、大正十二年（一九二三）予備役となっている。一方、「本邦築城史編纂委員会」は昭和八年（一九三三）、古代から明治維新までの各時代の築城に関する事蹟を調査するため、陸軍築城本部内に設置された。石割氏はその委員会のメンバーとして、各地で城跡の調査にあたった。残念なことに調査事業未完のまま、委員会の成果は空襲で失われ、現在は富山・石川県など一部地域を欠いた原稿の控や図面が残されている状況である[6]。前掲『日本陸海軍総合事典』によれば、石割氏は昭和十三年五月召集を受け、翌年には中支那派遣軍参謀付となっていることから、本県での城跡調査はその召集

直前だった可能性がある。なお、大類伸・鳥羽正雄著『日本城郭史』によれば、石割氏は中国大陸で一部隊長となったが、その後北支軍の命により中国国内の主要城郭を調査している。無論、軍事上の目的である。敗戦後の昭和二十七年没。

『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第拾参輯所収「富山県内城阯の調査」によると、その調査日程は次のとおりである。調査時には説明などのため、県の史蹟名勝天然紀念物調査会委員と書記が随行している。

いずれも中世から近世にかけての本県の主要な城郭・城郭寺院跡として知られる所ばかりであり、当時の築城史編纂委員会による全国レベルでの評価がうかがえるものである。ちなみにこの時の全十か所の内、現在県の史跡に指定されているのは松倉城・増山城・高岡城・阿尾城で、市町指定のものは升方城・弓庄城・井波城（前掲日程表の「瑞泉寺城」）である。本堂などが重要文化財に指定されている勝興寺を除けば、未指定は富山城と守山城の二か所だけである。明治期以来、さまざまな施設が置かれた富山城跡は別としても、万葉ラインの建設と公園化により一部で破壊を受けたとはいえ、山上に築かれた守山城跡が何ら指定を受けていないのは理解し難いところである。大正期以来、黒板勝美氏などが調査を行い、しかるべき評価を得ているのは、すでに述べたとおりである。

第一表　石割平造氏の県内城跡調査日程表（昭和十三年）

月　日	城　阯　名	説明並に随行者
五月十六日	松倉城、舛方城（下新　松倉村）	九里委員、中川書記
〃　十七日	弓庄城（中新　柿沢村）	〃　〃
〃　十八日	富山城（富山市）	小柴委員、〃
〃　十九日	瑞泉寺城（東砺　井波町）	〃　〃
〃　二十日	増山城（〃　梅檀野村）	〃　〃
〃　二十一日	高岡城、守山城（高岡市及射水　守山村）	〃　〃
〃　二十二日	勝興寺、阿尾城（射水　伏木町、氷見　阿尾村）	島尾委員、〃

それはともかく、この時、石割氏がどのような調査を行ったかを知る手がかりがある。それは飛見丈繁著『越中郷土史譚』第壱輯（昭和三十五年刊）所収の「守山城址推定図」である。山頂部の本丸を中心に二ノ丸・三ノ丸などを記入し、主要な長さを記入した主要部の簡略な見取図である。注目されるのは、図の説明に「昭和十三年島畑（マヽ）貫通参謀本部築城本部石割中佐両氏共同測量」とあることである。嶋畑貫通氏とは、戦前から戦後にかけて氷見市内で小学校の教員・校長を務めるかたわら郷土研究に励んだ人物であり、昭和四十七年に没している。[7] おそらく、石割氏の来県時には守山城跡で石割氏の見取図作成に協力したものとみられる。今となっては、この見取図が戦前における守山城跡主要部の遺構を伝える唯一の資料であり、貴重である。なお、嶋畑氏はこの翌年（昭和十四年）から敗戦まで朝鮮半島へ出向しており、この調査協力はその直前の仕事になったであろう。

坪利正之氏の調査

戦後の調査としては、坪利正之氏の成果をあげておきたい。氏は富山県立高岡工芸高校の地理歴史クラブO・B会誌『オジャラ』二号（昭和四十二年刊）に「二上城の構造」、同四号（同四十四年刊）に「二上城における城下町の歴史」を発表している。この内、前者は嶋畑・石割氏の図をもとに、聞き取った地名や公園化により失われた千畳敷（主郭）の土居の状況などを書きとめており、短いながらも当時の主要部の遺構を伝える報告として貴重である。

このあとも若干の調査成果はあるが、本稿ではここまでの基本的なものにとどめておきたい。

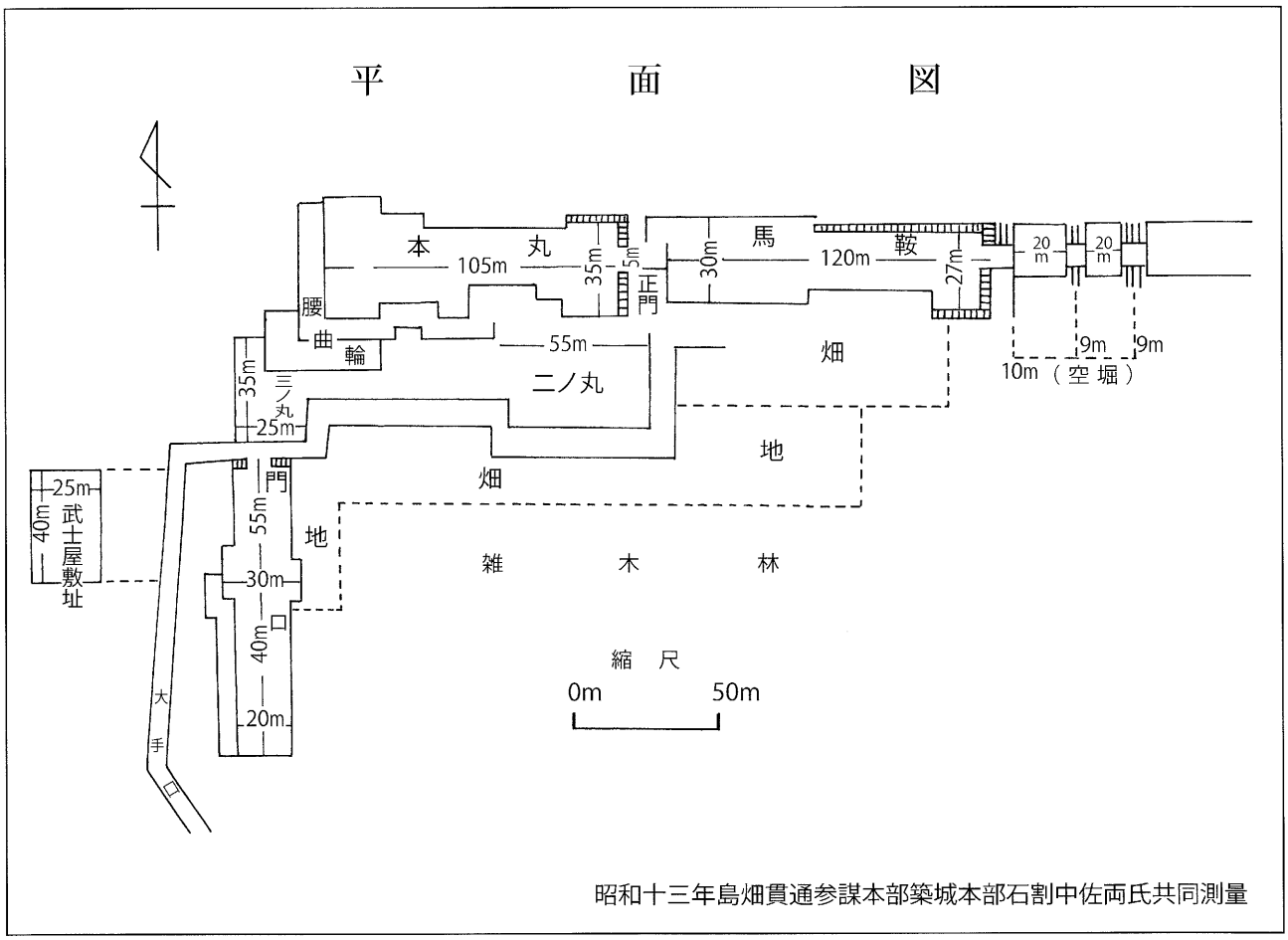

図２「守山城址推定図」（飛見丈繁著『越中郷土史譚』第壱輯所収）

三　文献史料から見た守山城の歴史

次に文献史料の上から守山城の歴史を時期別にたどってみたい。なお、ここでは従来の通説に従い、当城が南北朝から近世初頭にかけて存続・使用された同一の城であるとの考えに基づき、記述している。

1　南北朝期

守山城が初めて登場するのは、次の史料からである（傍点、筆者）。

（A）　得田次郎左衛門尉入道素章代子息斎藤六章房申軍忠事

右、今年（観応三）六月六日為越中国凶徒対治、当国（能州）守護吉見三河守（氏頼）殿御発向之間、御供仕之処、依手分里見左京亮に被付畢、同九日攻寄木谷・師子頭・三角山等之敵陣、鶉塚取陣畢、

一、同十四日桃井刑部（直信）以下御敵等、馳集氷見湊、可寄来当陣之由風聞之間、同夜中に押寄彼湊、致散々合戦、北市在家懸火間、御敵等引退南宿、引大橋中間令没落之間、打返当陣畢、

一、同十五日押寄三角山城、致散々太刀打、討取御敵白井弥八・渡部源八等畢、彼頸二人大将見参之族、被懸稲積河鰭之処、桃井刑部以下御敵等、自千久利・木谷・氷見・師子頭等、致後攻之間、及散々合戦、悉追散畢、

（中　　略）

観応三年九月　日

承了　　在判（吉見氏頼）⑧

これは観応の擾乱に際し、能登の吉見勢が幕府に敵対する桃井直信（元越中守護桃井直常の弟）らの拠点「師子頭」などを攻めたことを記したものである。当時、桃井方は氷見湊に本陣を置き、周辺の丘陵に城郭を構え、能登勢を迎え撃つ態勢を取っていた。「師子頭」もそうした城郭の一つである。ここに見える「師子頭」は守山の古名といわれ、別に「獅子ヶ面（つら）」と呼ぶ場合もあった。⑨前掲軍忠状によると、越中へ進攻した吉見勢は六月九日に「師子頭」などを攻め、同月十五日、三角山城を攻めた際には「師子頭」などの拠点から桃井方が救援に駆けつけている。すなわち、南北朝期の観応三年（一三五二）六月、守山城は氷見地方の木谷・三角山・千久利城などと並ぶ桃井方の軍事拠点であったことが知られる。二上山塊は、氷見地方のかなりの範囲から遠望できる高い山であり、同地方で展開された戦闘に際し、軍事上の主要拠点として無視できぬ存在だったと思われる。守山城の創築が十四世紀半ばにさかのぼることが、これによって明らかとなる。なお、「師子頭」・「獅子ヶ面」は、当時城郭が存在したピークの山容を表わす呼称だったと考えられ、城のあるピークが当時の人々に印象的な景観を見せていたことを示している。

その後も長らく幕府方への抵抗を続けていた桃井直常の軍事行動は、応安四年（一三七一）七月の五位庄（小矢部川中流域の現高岡市の南西部一帯）での合戦の敗北により終止符が打たれた。

桃井氏の没落によって、守護斯波義将による分国支配は安定期を迎えた。この頃、越中の守護所は、次に掲げる某書状（史料B）⑩に義将が「森山ニ御入候由」と見えるため、二上山塊南麓の現高岡市守護町付近に存在したと推測されている。⑪当地付近は加賀方面と越中国府を結ぶ古代以来の幹線道路の通過地であり、また、小矢部川水運の要地としても重要であった。こうした地理的条件が守護所の立地をもたらしたのであり、のちの近世初頭に前田利長が守山城に居城したことを考え合わせると、興味深いものがある。

（B）此間度々申候光台院御代官辞退之御状、此者可給候、次井野部儀付武衛（斯波義将）へ供僧中より巻数被遣、御礼被仰候者可然候由、彼方より

入魂候、森山ニ御入候由承存候、当年中ニ越前へ可有入国之由風聞候、
其分御心得候て可有御了簡候、返々彼書状此者可給候、

なお、麓の街道沿いに守護所が設けられ、斯波義将が入ったことからすれば、その拠点となる城郭は、背後にそびえる二上山塊に存在したはずである。義将の守護職在任は康暦元年（一三七九）頃までであり、翌年畠山基国が代わって守護職に就任している。

2　神保慶宗期

畠山氏は基国以降、代々越中の守護を務めたが、在京していたため、現地の統治には守護代があたった。当初、守護代には遊佐（ゆさ）氏が就任したが、のちに神保氏・椎名氏が台頭し、神保氏は射水・婦負郡、椎名氏は新川郡の守護代を務めた。この内、神保氏の越中入国は永享年間（一四二九～四一）とみられるが、守護代としての史料上の初見は嘉吉三年（一四四三）の備中守国宗からである。[12]

神保氏は初め、日本海側有数の港町である放生津に居城を構えていたが、永正十六年（一五一九）、越前守慶宗の代に至り、越後の長尾為景らの攻撃を受け、「二上城」にたて籠っている。この攻撃は越中守護畠山尚順の要請により、長尾為景が能登守護畠山義総と結んで行った慶宗の討伐であるが、ここで城名が「師子頭」から「二上城」に変わっていることに留意する必要がある。

為景はまず国境の境川で神保方を破り、続いて真見・富山に陣を張り、二上山の麓まで迫り、火を放った。慶宗の拠る二上城も落城寸前かとみられたが、「能州口不慮出来」し、攻略できぬまま、いったん帰国することとなった。このことから、永正十六年当時、二上城が放生津を本拠とする神保氏にとって、非常の際にたて籠る「詰城」として位置づけられていたことが知られる。南北朝期に創築された二上城も、この頃には次第に形が整えられていったものとみられる。何よりも神保方にとっての利点は、山上から射水平野が一望でき、長尾勢の動きが容易につかめること、また小矢部川の存在によって進攻を一時的にせよ、阻止できることにあった。次に前述の長尾勢進攻の経過を記す畠山尚順書状を掲げる。

(C)去年之働、度々両人雖令註進候、十月六日之書状、具加披見候、堺川一戦之次第、誠希代之名誉、不可有比類候、於真見富山張陣（ママ）、被励軍功様体、柴山藤兵衛尉委細申候、既二上之麓迄放火、彼城及落居計之刻、能州口不慮出来、無念此事候、両口如此云成立、云向寒気、当年帰陣無余儀候、（中　　略）
正月廿七日（永正十七年）　　畠山尚順　卜山（花押）
長尾弾正左衛門尉（為景）殿[13]

二上城に拠る神保慶宗は、越後長尾勢及び能登畠山勢などから、はさみ討ちされる形で攻撃を受けたのであるが、何とか危機を乗り越えたと言える。この内、畠山勢は氷見の湯山城（現氷見市森寺）などを前進基地として、北から二上城に迫ったとみられる。現在、二上山塊の随所に見られる城郭遺構の一部は、あるいはこの時の戦闘に関わるものであった可能性がある。

翌永正十七年、再度、慶宗討伐のため、長尾勢が越中へ進攻し、七月三日境川の守りを破り、続いて新庄に陣を布いた。これに対し、神保慶宗は神通川を越えて攻めかかったものの、十二月二十一日の合戦に敗れ、二上城方面への逃走の途中で自害している。[14]

一方、能登の畠山義総勢も長尾勢に呼応して越中に進攻し、二上城の攻略をめざしていた。そのことは、同年八月二十六日、長尾為景にあてた畠山尚順書状[15]に「就中、能州口之衆被申合、二上城早速令落居候之様、弥馳走頼入候」と述べられているとおりである。おそらく、新庄での合戦の

直後には、二上城は畠山勢の攻撃によって陥落していたとみられる。

なお、合戦直前の十二月七日、畠山尚順は為景に新川郡守護代職を与えている。[16]また、直後の十二月二十四日、為景は一族の長尾房景に対し「爰元ハはや用所無之候、帰国にて候、但多胡之様体見度候者、可被打越候、ともかくも任心中候、此方ハ多胡へこへ候て、一国取候しるし、隣国之覚も是訖(迄)申候間、明日ハ直小沢(津カ)へ可打帰候」と述べ、越中一国を取ったしるしに多胡へ赴くと伝えている。[17]多胡は二上山塊の北麓にある現氷見市田子のことであり、能登から進攻した畠山義総の陣所があったとみられている。為景は今回の新庄での戦勝報告を行うため、その義総陣所へ赴いたものであろう。

ところが、翌永正十八年春には、越中勢が再び蜂起し、二上城を攻撃するという事件が起きた。これに対し、為景は二上城が落城することになれば、能登までも困難が及ぶと述べ、長尾房景に出陣を命じている。

(D)越中張陣義(儀)、就中、去年極月廿一日一戦砌、各御働事、従畠山卜山(尚順)可被成御感書分候、先以自某可申届之由候間、乍憚進書状候、然而、彼国再乱、二上要害取詰相攻之由、度々註進到来、数年大忠、労而無功義候哉、其上彼要害落居候者、能州訖(迄)可為御難儀候、連々申談筋目可為相違候之間、重而可令出陣候、御陣労雖勿論候、有用意、今月中御着陣簡要候、順番次第註文別紙在之、努々不可有御油断候、恐々謹言、

四月三日(永正十八年)　　為景(弾正左衛門尉(長尾))(花押)

長尾弥四郎(房景)殿

御宿所[18]

この中で、二上城が「二上要害」と呼ばれているのは、峻険な山上に構築された同城の実態を具体的に表現するものとして、興味深い。当時、二上城には畠山尚順から派遣された神保出雲守慶明らが守りについていたとみられるが、これを攻撃したのは、越中の一向一揆であったと考えられる。[19]その背景には、長尾為景による同年二月の越後国内での一向宗禁止令布告[20]があり、これに反発する越中一向衆の蜂起だったと推測される。それはともかく、この永正十六年～十八年の一連の戦乱の中で、二上城が戦局の焦点となり、その動向が能登にまで影響を及ぼす位置を占めていたことは、注目されねばならない。

3　神保長職期

さて、放生津神保氏の滅亡後、雌伏を続けてきた神保氏の再興の動きは、享禄四年（一五三一）頃より認められる。その役割を担って登場した長職は天文十二年（一五四三）頃、富山に築城し、やがて西は氷見の南部から東は芦峅寺（現立山町）にかけての広い地域に勢力を築くに至った。だが、その領域支配の実態は、従属した土豪・国侍らの旧来の支配を容認したとみられ、必ずしも強固なものではなかった。しかし、長職の領域支配は、形の上とはいえ、領域内の要所に支城を網の目のように張りめぐらすものであり、この支城網が支配の根幹を形成していた。富山城を本城とするこの支城網は、各郡ごとに置かれた拠点城郭（第一次支城）を中心に、さらにその周辺に出城（第二次支城）を配置するものであった。この内、第一次支城には神保氏の一族や寺嶋・小嶋氏らの有力家臣が置かれ、狩野氏・轡田氏ら従属した国侍の居城も同様の支城として位置づけられた。

では、長職時代の守山城には、誰が配置されていたのか。このことを示す史料として、「彭叔和尚語録」[21]に「大日本国北陸道越之中州射水郡守山城居住住三宝弟子、職広(神保)、来明年乙卯正月十八日、伏過春正宗統大姉七周忌之辰……」とあり、天文二十三年（一五五四）当時、神保職広が守山城の城主であったことが知られる。そして「守山城」なる城名が見られるのも、実はこの時からである。この職広は、神保長職から「職」の一字を与えられたとみられ、神保一族の中でも長職系の者であったと考えられる。この

時期、神保氏の勢力は氷見地方の南部に及んでおり、守山城は特に同地域の国侍・土豪らを統制・支配していく上で、大きな役割を担っていたと言える。

ところで、神保長職の強大化により、永禄二年（一五五九）新川郡の椎名氏との間で抗争が起こり、長尾氏による調停が行われたが、神保家臣の中にはこれを不満とする者がおり、武田信玄と結んで連携を取る動きを見せた。このため、翌三年三月、神保長職を攻めるため、長尾景虎（のちの上杉謙信、以下「謙信」と呼ぶ）が越中へ出兵し、富山城・増山城を次々に攻略し、長職を駆逐した[22]。

こうした神保方の一連の敗北により、西の有力支城であった守山城方面にも大きな動揺が生じた。次の狩野良政書状はその模様を伝えるものである。

（E）態令啓候、仍今度者守山自落不成積仕合無念候、然者其刻林次兵無同心事併自拙夫申越候付、先々取合手段可然候、乍去偏長職（神保）様へ御身方候様と山（富）より相聞候、これも人質故与令分別候、此表於行者、貴所とりあつかいをもて同心候様ニ可有馳走候哉、其上にて無同心者、貴所其外名中被相談、土倉共ニ同心候者可為尤候、然者土倉三郎二郎殿へおり〳〵（案）始末申越候間、おんミつをもて御心庭之旨可承候、於其上拙夫思安之通重而可申入候、委曲之事御報可承候、恐々謹言、

（永禄三年）四月廿日　　狩野中務丞　良政（花押）

田端殿（さわこ）

御貴所[23]

狩野良政は守山城の北西に位置する飯久保城に本拠を置く国侍で、書状からもわかるように、長職へ人質を出し、神保氏に従属していた。狩野氏の勢力は飯久保から仏生寺川の上流部、鞍骨山にかけて及んでおり、その西方、能登国境付近の「さわこ」、すなわち沢川（そうごう）（現高岡市）の田畑氏とは日常的に親交があったとみられる。

書状は、今回の敗戦により、守山城が「自落」したことを述べ、氷見方面に上杉勢の進攻が行われた場合の対応を田畑氏に問いかけているものである。「自落」とは、戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落することをいう。この時の「自落」は、おそらく富山城・増山城での敗北により、守山城を守っていた神保職広などが、いち早く城を捨て、逃走したことを物語るのであろう。それはともかく、前掲書状からは守山城周辺での国侍らの動揺がうかがえ、同城を中心とした神保氏の支配（国侍・土豪層の掌握）のもろさが明らかになる。

こうして、いったんは逃げのびた長職ではあるが、まもなく越後勢の帰陣とともに失地を回復し、新川郡の椎名氏を圧迫する勢いを示した。このため、永禄五年（一五六二）十月、謙信は越中へ出兵し、長職のたて籠る増山城を攻め、近辺に放火して城を孤立化させた。窮地に追い込まれた長職は、能登畠山氏の仲介により謙信に降っている[24]。

4　神保氏張期

こののち、長職は元亀三年（一五七二）初めに没するまで上杉方に属することになるが、守山城方面ではこの状況を受けて、大きな変化が見られる。それは神保氏張の入城である。氏張は神保庶流の豊前守氏重（法名一道）の子であったが[25]、能登畠山義続の猶子となり、能登方の意向を越中神保方に指示する役割を担って、守山城に置かれたとみられる[26]。すなわち、守山城は永禄五年頃より能登勢力と越中の神保長職方との境界線上に位置することになる。とはいえ、この時点での氏張は、長職支配領域下における一支城主としての立場も保持しており、依然、氷見南部地域に対する長職の支配は、形の上で維持されていた。

ところが、永禄十一年（一五六八）、長職が謙信と結び、以前恩義を受けた能登畠山義綱父子の帰国運動に協力すると、神保家中で対立が生じた。この結果、長職の子長住や、一族の氏張、さらには有力家臣の寺嶋・小嶋（槻尾）・水越氏らが反上杉方に走った。同年三月、謙信は畠山父子の帰国

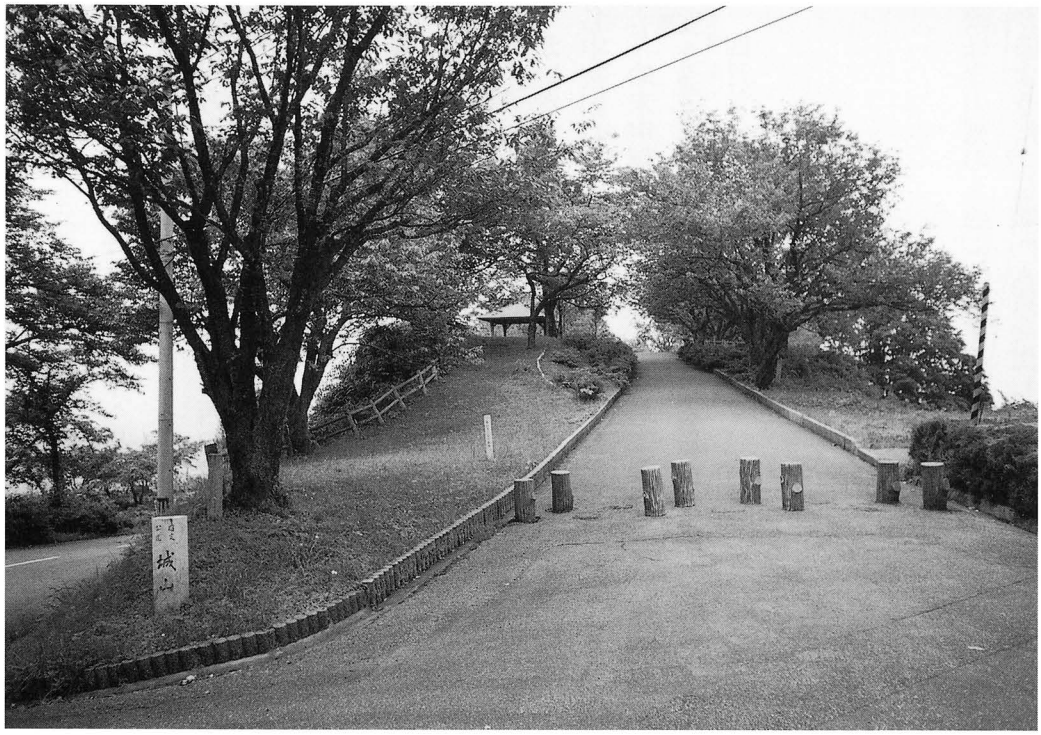

写真２　守山城本丸跡入口（現在の城山山頂）

を推進するため、越中の中部へ進攻した。この時の目標の第一は、帰国作戦の行く手を阻む守山城の攻略にあり、これを報じた勝興寺顕栄書状[27]にも「随而輝虎此国江出張之旨、一昨日俄ニ従一両所雖申来候、いつもの雑説と存候処、昨日（三月十五日）午刻之時分より中郡江取出候、地利等□□之由申、驚入存候、今度長尾出馬之意趣者、守山を責伏、能州之屋形（畠山義綱）を入国させ可申との図にて候由、難側（測）次第迄候」（傍点、筆者）とある。

このように守山城は能登進撃を企てる上杉勢の攻略目標となっているが、それは長職方から離脱した氏張が、畠山父子の帰国を望まぬ能登重臣層の強い影響を受けていたからにほかならない。しかし、上杉勢は放生津に陣取ったものの、越後国内での本庄繁長反乱の報を受け、三月二十五日未明、同地から撤退している。[28]

一方、長職は永禄三年頃より増山城を居城としていたようであり、離脱した氏張を攻めるため、十月、守山城から小矢部川をはさんだ対岸の西条（現高岡市）へ兵を進め、「河ふち」に陣取った。しかし、この地域は一向一揆の有力寺院である石堤長光寺などの勢力が存在し、一揆方は守山城の氏張らとも緊密な関係を持っていたとみられる。このため、勝興寺顕栄は長光寺に対し、五位庄地域の門徒を結集して、これに対処するよう求めている。その書状を次に掲げる。

（F）　尚々御門徒衆被御相談馳走専一候、かしく、

急度一筆遣候、仍西条へ増山衆就打入各武者たち、河ふちを被相拘之由候、其庄（五位庄）之儀、申合西条へ合力専用候、年寄共かたへ雖可申遣候、各覚悟難測（永禄十一年）候之条、両人以談合御門徒衆申合馳走肝要候、恐々謹言、

十月十九日　　顕栄（花押）

長光寺御房

進之候[29]

こうした攻撃にもかかわらず、守山城は氏張によって引き続き維持された。これに対し、長職は離反した槻尾氏の所領（氷見の与川・小杉ほか）を没収し、永禄十二年十月二十五日、一族の神保覚広に与えている。[30] また、同年十一月十五日には、同じく没収した氏張の所領を二宮余五郎に与えている。

（G）於度々御忠節儀候間、御知行分内、此方被官人一円ニ進之候、并同名宗五郎（神保氏張）知行内にひとう（人母）・松永雖少地候、進之置候、弥御馳走肝要候、仍如件、

永禄十二
十一月十五日　　長職（神保）（花押）
二宮余五郎殿
参[31]

人母・松永はいずれも砺波郡西部（現小矢部市）に位置するが、これまでは守山城主神保氏張の知行だったわけである。晩年の長職にとって、守山城の存在は容認し難いものだったのか、元亀二年（一五七一）三月、謙信は特に長職の要請を受け、越中へ出兵する。しかし、この時も六渡寺川（小矢部川）の増水によって渡河できず、攻略はかなわなかった。まことに小矢部川は、天然の水堀であった。

（H）如被申越長職色々被歎候間、不図出馬十七日神通越河、十九三日之内ニ敵地悉落居、内々守山・湯山可擬落処、六同（渡）寺断而水増故、今不令越河候、於用立者可心安候、被入心飛脚早々喜悦候、弥可加懇意心中ニ候間、同意肝心ニ候、恐々謹言、
三月廿日（元亀二年）　　謙信（上杉）（花押）
温井兵庫助殿
長九郎左衛門（綱連）殿
平新右衛門殿
遊佐役太郎殿[32]

翌三年初め頃、長職は没し、まもなく同年六月から加賀一向一揆が越中へ攻め込み、富山城などを中心に上杉勢と戦闘を繰り広げた。しかし、一揆方は武田信玄の死去により有力な後援者を失い、やがて力が衰えていった。そして、天正四年（一五七六）、本願寺と謙信の和睦が成立すると、謙信の行く手を阻む者はいなくなった。同年九月、ついに謙信は椚尾城（現富山市）・増山城などを攻略し、九月八日付の書状[33]に「湯山城をまもなく攻略し、明日西へ進撃する」と記している。おそらく、この時点で守山城の氏張も情勢の変化を見て、謙信に服属する道を選んだのであろう。これに対し、氷見北部の湯山城には反上杉方の能登勢が守りについていたとみられる。

やがて謙信はこの天正四年から五年にかけて、能登・加賀一帯を制圧する。この間の天正五年二月には、氏張が謙信の加賀出兵に従う旨の返書を提出している。[34] 同年十二月、謙信が麾下の将士を書き上げた名簿[35]の中には「神保安芸守（氏張）」の名が見られる。

だが、謙信は同六年三月急死をとげ、その報せは北陸一帯に大きな衝撃をもたらした。上杉方の動揺に乗じ、いち早く行動に出たのは、織田信長である。『信長公記』巻十一によると、信長は四月、かねてより信長のもとに身を寄せていた長住を京都の二条の館に召し寄せ、佐々長穐を添え、飛騨経由で越中へ入国するよう命じた。こうして長住の入国により、越中では織田方と上杉方の戦いが展開され、国侍・土豪達はそのいずれの側に付くべきか、岐路に立たされた。

そうしたなか、神保氏張は早くも同年十一月、能登を脱出した織田方の長孝恩寺（のちの連龍）を守山城に迎え入れ、旗色を明らかにしている。

（Ⅰ）（前　略）仍此中者能州面之時宜、無御心元存候処、無異儀、越中至守山被相越候由、尤珍重存候、上意猶以御祝着之旨、被成　御朱印候、貴所御事馳走被申候様にと、神保越中（長住）・神保安芸（氏張）・寺崎かたへ被遣御朱印候、神安・佐権左（佐々長龍）への御書者、実書進之候、自其、可被相届候、神越・寺入かたへの者写進之候、来春必可為御出勢候間、涯分各被仰談、御調儀専一候、（中　略）

十一月十一日（天正六年）　　堀久太郎

長孝恩寺　　秀政（花押）

御返報[36]

これによると、信長から神保長住・同氏張・寺崎民部左衛門に対し、長連龍を援助するよう朱印状が遣わされたが、氏張あてのものは実書で、長住と寺崎氏あてのものは写しだったという。この時期、信長が越中進出にあたり、氏張を重視していたことは、『寛政重修諸家譜』が氏張の妻を織田信秀（信長の父）の娘としていることからもわかる。おそらく、信長としても、越中平定のためには、地元の有力国侍である氏張の協力を得ることが不可欠だったのであろう。のちの天正九年（一五八一）初め、越中に分封された信長の部将、佐々成政も氏張の子、氏則に娘を娶らせており（『寛政重修諸家譜』）、同様に氏張重用の方針が受け継がれている。結果的に、氏張もその期待に応え、織田（佐々）方に長く忠節を尽くすのである。

織田の部将、佐々成政が越中へ分封されると、上杉・織田の戦いは熾烈なものとなっていくが、成政は当初、氏張の居城・守山を本拠としたようであり、「越中古跡粗記」[37]に「天正九年、佐々内蔵助成政暫く在城して有ける、其後富山江被引移候…」と記されている。その後、越中一国を領することとなる成政が、守山城にまず入ったことは、同城の高い軍事上の位置づけを示すものと言わねばならない。

ところで、信長の後援を受けて越中へ進出した神保長住は、国内の西半部を制圧していったが、天正十年三月に起こされた、小嶋職鎮ら神保旧臣による富山城占拠事件によって失脚し、やがて越中を去った。これを契機に佐々成政は富山城に移ったとみられ、長住に代わり、越中平定をおし進めていく。守山城の氏張はその片腕となり、成政に従い、各地を転戦する。同十一年、国内を平定した成政は、翌年八月、徳川家康・織田信雄と結び、前田利家と戦端を開いた。しかし、次第に戦況は不利となり、家康らの講和により支援を絶たれた成政は、同十三年（一五八五）八月、秀吉に降った。

「末森記」[38]によると、対前田戦に際し、能登との国境線上にある荒山砦（現氷見市）には、神保氏張の部将袋井隼人が置かれ、守山城は氏張父子が四千余の兵を率いて守っていたという。加越国境を中心に展開された前田方との戦いでは、この守山城は成政方の有力支城の一つとして位置づけられている。

「末森記」によると、天正十三年六月、神保氏張父子は成政方から離反した阿尾城（現氷見市）の菊池氏を攻めるため、守山城から出撃し、戦闘を交えている。「越中四郡古城跡」[39]によれば、氏張が氷見で能登勢と戦っていた頃、無勢になった守山城を放生津城主が攻め、一時守山の城を占拠したという。城を守っていた氏張の父一道はその折討死をとげたが、氏張は夜襲により城を奪回し、その後、放生津城も回復したという。後世に書き留められた伝承であり、この阿尾城をめぐる戦いの時かどうか、今のところ詳細は不明だが、興味深い内容と言える。

5　前田利長期

天正十三年八月の成政降伏により新川郡を除く三郡が前田利家の子、利長に与えられた。これにより、利長が加賀松任城より神保氏の去った守山城に入り、同城を居城とした。これは先の成政入国時と同様であり、守山城が越中西部の中心拠点とみなされる存在であったことを裏付けている。

なお、『越登賀三州志』（以下、『三州志』と呼ぶ）は、この年、利家が部将の岡島一元を置いたとも伝えている。

ところで、利長の入城にあわせ、城郭の早急な整備も図られ、近くの国泰寺（おそらく摩頂山の現弘源寺付近にあった頃であろう）から方丈（住職の居室）が城内の施設に転用されている。

（J）当寺方丈之儀、守山江取申候条、残小寺並山林之事不可有異儀候者也
後（天正十三年）八月十一日　又左（前田）　利家　在印
国泰寺
納所御中[40]

（K）　以上
御寺方丈之儀、守山江御用之儀に而被為取候、然者残候小寺共、無別儀被為参候、方丈之儀者、小屋かけ成共可被成候、（中　略）
閏（天正十三年）八月十一日　寺島甚之丞　在判
国泰寺
侍者禅師[41]

城郭の築城にあたり、周辺の石仏や墓石などの石造物が石垣石材に転用されることはよく知られているが、[42]越中の場合、このように寺院の建物が転用された事例が残るものは他になく、極めて貴重である。なお、次に掲げる貞享二年（一六八五）の国泰寺由来書上[43]によると、くだんの方丈は城内の書院にあてられたことがわかる。

（L）　就御尋申上候
（中　略）
一、御当家　高徳院様初而守山江御入城之年、当寺ノ方丈ヲ御城書院ニ被為成、其節小寺山林異義有間敷之被成下御印、（中　略）
貞享弐年二月廿三日　越中国泰寺
不（不破彦三殿）
富（富田治部左衛門殿）

天正十八年（一五九三）、秀吉は小田原城の後北条氏を討つため、関東へ進攻し、前田氏もこれに参陣する。『三州志』によると、この時、部将の前田対馬守長種が留守将として守山城を守ったという。

こうして迎えた慶長二年（一五九七）十月、利長は居城を富山城に移転する。『三州志』はその理由を「是守山高聳、風威猛烈なるを避くる也」とあげる。確かに戦国乱世の時代が去ったこの時期、高く険しい要害な山上に居城を構える必要はなくなったと言える。[44]また、越中一国の統治のためには、国の中央に位置する富山城の方が、居城としては適していたのである。このことは、佐々成政の富山居城を見ても明らかである。

『三州志』によれば、利長の移転後、前田長種がしばらく留まり、城を守ったという。のち、城は廃城となり、その長い歴史を閉じている。廃城の時期は、次の史料から慶長三年七月以前と考えられる。

（M）守山屋敷跡之事東海老坂分、従来年如思々、可令開作候、御年貢等之事者以縄打可申付者也
慶長三　七月廿三日　つしま　長種（花押）
海老坂小四郎
かたへ[45]

これは廃城後に前田長種が東海老坂地内の「屋敷跡」の開作を命じたも

のであり、この時点で城の周辺にあった家臣団の屋敷が移転により跡地になっていることが知られる。

註

① 佐伯哲也「神保氏の重要拠点」（『越中の中世城郭』創刊号　平成三年刊）。同「神保氏の重要拠点（2）」（『越中の中世城郭』第二号　平成四年刊）でも同様の見解が見られ、同「神保氏の重要拠点」（『富山史壇』第一〇七号　平成四年刊）では「峰を堀切で遮断し、郭（削平地）を並べただけでの旧態依然とした純然たる越中土豪の城である。（中略）天正十三年に大改修された形跡は全く見られない」とし、さらにいかなる根拠によってか、「天正十三年守山城に入城した前田利長は、守山城を大改修もせず、少数の番兵を在城させて、自らはもっぱら山麓の居館にいたのであろう」とまで断じている。

② 『国史大辞典』

③ 斎藤忠著『考古学史の人びと』によれば、昭和二十七年（一九五二）没。大正九年（一九二〇）に内務省史蹟名勝調査の嘱託となり、のちに文部省で重要美術品の認定や重要文化財・国宝の指定・保存に活躍した。

④ 「随行紀」及び『富山日報』大正十一年八月十六日付記事

⑤ 『富山県文化財・文化施設等一覧』　平成十八年刊

⑥ 中井均「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』について―敗戦前の城郭研究史を理解するために―」（『中世城郭研究』第七号　平成五年刊）

⑦ 寺岡清「嶋畑貫通略伝」（『氷見春秋』第二七号　平成五年刊）

⑧ 『富山県史』史料編Ⅱ中世　三二七号

⑨ 森田柿園は『越中志徴』の中で「按ずるに、享保二年邑長書上帳に、守山は昔は鹿頭（シヽカシラ）山と云。神保安芸守増山より此地へ移り城を築きし時、守山と改名すと。宝暦十四年調書にも、先年しゝがつらと申山にて有之處、神保安芸守居城之頃、守山与名付由申伝とあり」と記し、江戸期の書上帳や調書に「鹿頭（シヽカシラ）山」や「しゝがつら（面）」が神保氏張居城以前の古名としてあげられている。富田景周の『越登賀三州志』故墟考も「此の山古へは獅子ヶ面と云ふ」と記している。

⑩ 『富山県史』史料編Ⅱ中世　五二二号

⑪ 久保尚文「富山県概説」（『日本城郭大系』第七巻　昭和五十五年刊）

⑫ 『富山県史』史料編Ⅱ中世　七〇二号

⑬ 同右、一二七八号

⑭ 同右、一三〇二号

⑮ 同右、一二九六号

⑯ 同右、一三一四号

⑰ 同右、一三〇三号

⑱ 同右、一三一一号

⑲ 久保尚文「長尾為景越中攻略過程の再検討」（『越中中世史の研究―室町・戦国時代―』昭和五十八年刊）

⑳ 『富山県史』史料編Ⅱ中世　一三〇九号

㉑ 同右、一五七〇号

㉒ 同右、一六一四号

㉓ 同右、一六一二号

㉔ 同右、一六三四号。なお、上記の『富山県史』史料編では長職のたて籠った城を現富山市城山の呉服山としていたが、原文書の確認により今回、増山城に改めた。

㉕ 横澤信生「神保氏張の父について」（『富山史壇』第一二八号　平成十一年刊）

㉖ 久保尚文「神保氏張の出自について」（『越中中世史の研究』）など。なお、神保一道・氏張父子の伝承は、現富山市針原中町にも残され

ている。すなわち、「聞見雑録」（金沢市立玉川図書館蔵）は「針原庄中村」の城について「神保一道・同安芸守（氏張）・同五郎」の名をあげ、「十二代于此住ス、先祖ハ富山ノ神保ノ庶子筋也、右安芸守東岩瀬へ手ヲ延、城ヲ（マヽ）暫ク住ス、其後氷見ヲ切捕住ス、其後佐々陸奥守ノ旗下ニ成テ、五郎ヲ奥州ノ聟ニナシテ守山ニ居住ス」と記している。この伝承によれば、神保氏重（一道）・氏張父子は当初、針原に本拠を置いていたようだが、今のところ詳細は不明である。現針原中町の光慶寺はその神保氏の城跡と伝えられている（高岡徹「中世の広田」『広田郷土史』平成八年刊）。

㉗『富山県史』史料編Ⅱ中世　一六七七号

㉘同右、一六七八号

㉙同右、一六八七号

㉚同右、一七一〇号

㉛同右、一七一六号

㉜同右、一八五二号

㉝同右、一八五九号

㉞同右、一八六八号

㉟同右、一八八四号

㊱同右、一九一九号

㊲金沢市立玉川図書館蔵

㊳『前田氏戦記集』昭和十年刊

㊴㊲に同じ。

㊵『増訂加能古文書』

㊶同右

㊷たとえば、大和郡山城（現奈良県大和郡山市）の例など。

㊸『加越能寺社由来』上巻

㊹利長の富山城移転に合わせ、家臣の岡嶋一吉らが呉服山の城に置かれたが、やはり同様の理由をあげ、麓の安田城（現富山市）におりて居住したという（『三州志』）。

㊺『富山県史』史料編Ⅲ近世上　七三三号

Ⅱ　二上山山頂の城郭遺構とその性格

―守山城史の再検討―

二上山は二上山塊の最高峰（標高二七二・七m）に位置する主峰であり、「二上ゑごぜん（御前）」（「越中四郡古城跡」）、「奥の御前」とも称される。二上山塊の中でもひときわ高くそびえ、古来、神の宿る山として信仰の対象とされてきた。軍事上、山塊の最高所を占める当山上は、通常、城郭構築の適地として最初に選ばれるはずである。しかし、中世以来の守山城は当山頂から西南に約五〇〇mを隔てる峰（いわゆる「城山」）の上に築かれた。その山頂は、築城の際に削平を受けたとはいえ、二上山頂より高さが一四m低い位置となり、いささか防御上の不安を残している。

守山城がこのように多少の不利を忍んで、二上山頂に手を付けることなく、西方の低い峰に築かれたのはなぜか。この点について、筆者は、これまで二上山頂が古くより信仰の対象となる神聖な場所であったがゆえに、歴代の武将があえて同山頂を城郭化しなかったものと考えてきた。無論、高岡市や県の遺跡分布図にも、従来は城跡として記されていない。ところが、近年の二上山塊踏査の過程で初めて山頂一帯に城郭遺構が残ることを確認した。この結果、二上山頂が中世のある時期に城郭として使用されていたことが明らかとなった。ここでは城名を便宜上、「二上山城」と呼ぶこととし、以下、縄張図（図3）にもとづき、遺構の概要を紹介する。

まず、城郭の中心部となる主郭は、山頂のA郭である。ここは南西から北東に伸びた細長い平坦面（八×四〇m）で、中央の幅は五mと狭い。中ほどに日吉神社の祠があり、信仰の山であったことを示している。南東角は崩れ、北端部には深く掘り込んだ跡がある。最高峰だけに各方向に対する眺望はよい。

さて、防御施設であるが、まず南側の万葉ライン（自動車道）駐車場から山頂までは遊歩道の設置によって斜面がかなり改変され、現状では堀切などの遺構を確かめられない。これに対し、多数の防御施設が存在するのは、西側に伸びる尾根筋である。ここには№1～6の六か所もの堀切が認められる。これは西側が尾根伝いに守山城のある峰へ続く連絡路にあたるためとみられるが、それにしてもこのように堀切を集中して設けているのは、驚きである。西方に対する尾根道の傾斜がゆるく、比較的登りやすいことが、堀切を多用した理由かも知れないが、やはり、守山城のある西峰方向を特に警戒したためであろうか。

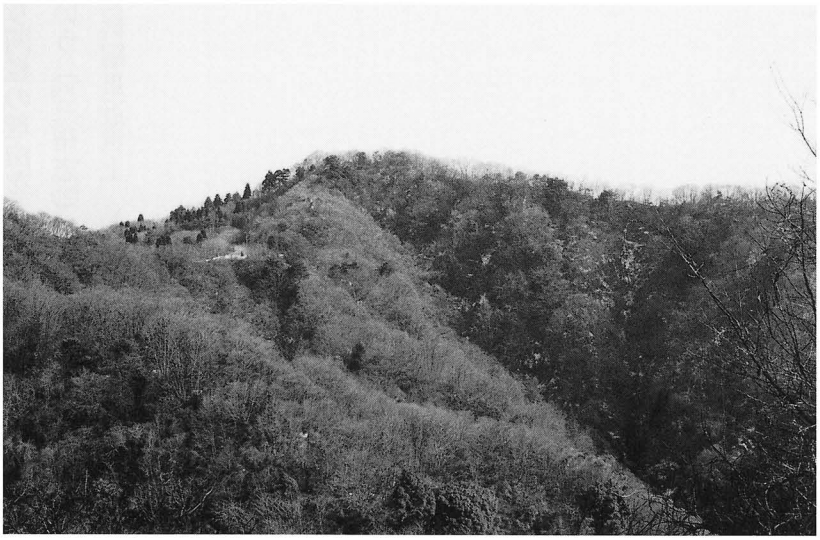

写真３　二上山の山頂部（北西より。右手は守山城へ続く尾根筋）

西端の堀切No.1は尾根道の南側を上幅三mでやや深くえぐって設けられ、北側は掘り残されて幅〇・七mの通路となっている。つまり尾根道の片側だけを掘り込み、残る片側を土橋状の通路とした「片堀切」である。その意図は尾根道の通路幅を狭め、攻めて来る敵が一気に進撃できぬようにし、守る側が少人数でも敵を食い止められるようにすることにあった。

ここから北東に約二〇m登った所にNo.2の堀切がある。No.1と同じように、尾根道の南側を上幅四mで少し浅くえぐり、北側は掘り残して幅〇・六mの土橋状の通路とする。これも片堀切である。そこより約一五mゆるく登ると、No.3の堀切がある。ここは片堀切ではないが、尾根道の両側を少し間を置いて食い違いに掘り込んだ形跡がある。この先はやや水平な尾根道となり、一〇m余り進んだ所にNo.4の浅い片堀切（南側）がある。上幅は三m、深さは一m程度で、北側の通路幅は一mである。なお、No.1からこのあたりまで、尾根道の北側は深く急な崖が続いている。これに対し、南側はややゆるい斜面となっている。おそらく、こうした地形上の理由から、大半の堀切が南側に設けられたのであろう。

No.4から二m先に、今度は北側をえぐったNo.5の片堀切（上幅二・五m）がある。南側の通路幅は一mだが、このように小規模ながら右、左と交互に掘り込みを設けることで効果的な防御となっている。この一〇m先には、両側を掘り込み、中央を土橋（幅〇・七m）として掘り残したNo.6の堀切がある。両サイドの掘り込みを比べると、やはり南側が重視されているとみえ、こちらが掘り込みの規模が大きい（上幅五・五m）。この先は急な登りですぐに山頂の主郭に達するため、主郭直下の堀切として、特に他よりも念を入れた形跡がうかがえる。

次に山頂の東側に目を向けてみる。こちらも西側と同様、急峻な斜面だが、主郭の南東部直下から南東方向に細い小尾根が張り出している。付け根から少し下ってみると、途中に小さな段差（イ、高さ一・五m）を設け、下からの登りに備えた形跡がある。そこから万葉ラインを越えて下った細い尾根には、上幅三・五m、深さ三・五m（山頂側）の堀切No.7があり、その先で尾根が谷に落ちるにもかかわらず堅い守りを設けている。

北側には北東方向と北西方向に二本の尾根筋が伸びている。この内、途中に展望台のある北東方向へは、主郭から少し下った所に六×八mの広さで腰郭状の平坦面（B）を設ける。続いてやや急な尾根を下ると、（ロ）の地点に二mの高さで切岸の段差を設け、下に小平坦地を配する。ここから下は尾根筋の傾斜がゆるくなるため、その変換点で下からの攻撃に備えようとしたものであろう。この切岸から万葉ライン沿いの展望台まで、また展望台から東方に伸びる尾根上には遺構が見られない。

最後に北西方向の尾根筋について述べる。この方向は北の摩頂山・大師岳へ続くルートとして重要だが、以前は遊歩道を何気なく下ってしまい、遺構は見出せなかった。しかし、城郭化の意図を考えるなら、この重要ルートに何もないはずはないと思い、近年の踏査時に注意深く観察したところ、山頂部から三〇m余りの高さを下ったNo.8の地点で、やや大きな切岸と堀切からなる防御施設を見つけた。切岸の高さは三・五mで、その下に尾根道を切断するように堀切が長さ一四mにわたって設けられている。さらに堀切には北側に肩を作るように低い土塁も付設され、他の尾根筋、特に西側尾根筋の片堀切などとは比較にならない、厳重な守りとなっている。二上山の城郭化を物語る重要な遺構と言っても過言ではないが、過去の公園化の際の遊歩道作りによって、堀切の中央部が損なわれ、一部消滅したことが惜しまれる。

この堀切からなおも北へ下ると、高さ四mで尾根筋が切られ、切岸（ハ）になっている。前述のNo.8堀切と共に城の北側を守る防御施設だったとみられる。この下には万葉ラインに沿うように二〇×四五mの広い平坦面（C）がある。山頂の主郭から離れていることから、当城郭に伴うものかどうか、にわかに判断はできないが、一応は城の北端に設けられた郭跡と考えておきたい。また、このC郭の西側二〇m下には深い谷に面して一一

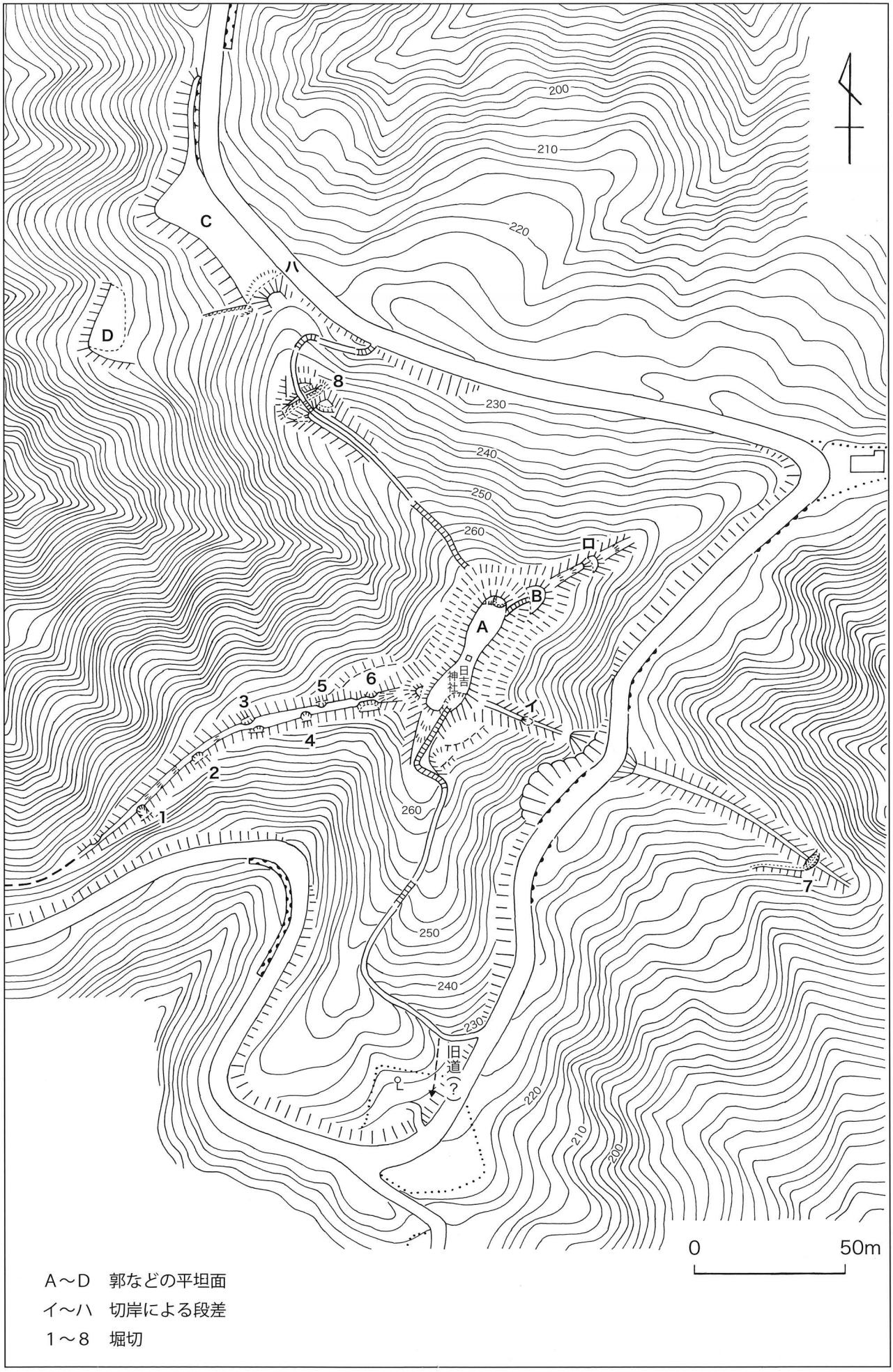

図３　二上山城縄張図　（作図　高岡　徹）

写真４　二上山の山頂（南より。二上山城の主郭にあたる）

写真５　二上山城の遺構①（堀切 No.7 を北側から見る）

写真６　二上山城の遺構②（堀切 No.8 の西半部【竪堀状】を中央の遊歩道から見る）

×二一・五mの平坦面（D）が残されている。性格は不明だが、ここも当面は城の関連遺構に含めておきたい。

一方、主郭の南側斜面にも何らかの施設があったはずであるが、前述のように遊歩道の建設によって遺構が見出せないのは残念である。

以上、個々の遺構を見てきたが、防御の重点となる尾根筋が北西と西の二本のルートであることは、この山頂部が大師岳・摩頂山と城山（守山城のある西峰）を結ぶ尾根道の通過点として、山上交通路の重要ポイントにあたっていたことを示している。そしてまさにその理由によって、この山頂部一帯の軍事拠点化が図られたと言える。

では、二上山城が構築・使用された時期はいつ頃なのか？西の守山城のように大規模な平坦面や切岸などを持たないことから、当然、時期は古いとみなければならない。結論的に言えば、現在残る遺構からは、南北朝から戦国にかけての時期が考えられる。たとえば、西側の尾根沿いに残る簡素な片堀切やイ・ロの切岸などからは南北朝期、また北西側に残る堀切（№8）や切岸（ハ）などからは戦国期における使用が推測できそうである。ここで南北朝という時期をあげたのは、いささか唐突であるかも知れない。しかし、南北朝期に使われた山城は氷見地方の芝峠砦や千久利（里）城、砺波地方の千代様城などのように、多少なりとも周囲から高く、そびえ立つような景観の山頂を選んで築かれることが多い。そうした点を考慮して二上山塊を見渡すなら、やはり最高峰として周囲からもひときわ高い二上山の山頂が当時の軍事拠点として利用されたことは想像に難くない。すなわち、この二上山山頂に南北朝期の「師子頭」城が存在したと考えられるのである。

ちなみに、平成六年、西井龍儀氏は「弘源寺予備調査報告」（『越中二上山と国泰寺―弘源禅寺総合調査予備報告書―』）の中で、「奥の御前」において採集された十三～十五世紀の土師器を紹介されている。氏は祭祀に関わるものと推測されているが、南北朝期に城郭が存在したことを裏付ける資料となる可能性もあろう。これまでは西の支峰にある守山城跡をもって、南北朝期（「師子頭」城）から近世初頭（「守山城」）にかけての一貫した城地として伝えられ、またそのようにみなされてきた。しかし、今回の遺構の確認により改めてそのことを見直すべき時がきたと考えられる。

続く神保慶宗期（戦国期）も問題である。すでに見てきたように、永正年間の史料上では「二上城」や「二上要害」として現われる。「奥の御前」と呼ばれる二上山の山頂一帯が、古くは南麓の二上に存在した真言宗養老寺の所有であったことを考えるなら、この城名はやはり二上山の山頂部に由来するものと考えられる。そうであれば、神保慶宗が永正年間に詰城と

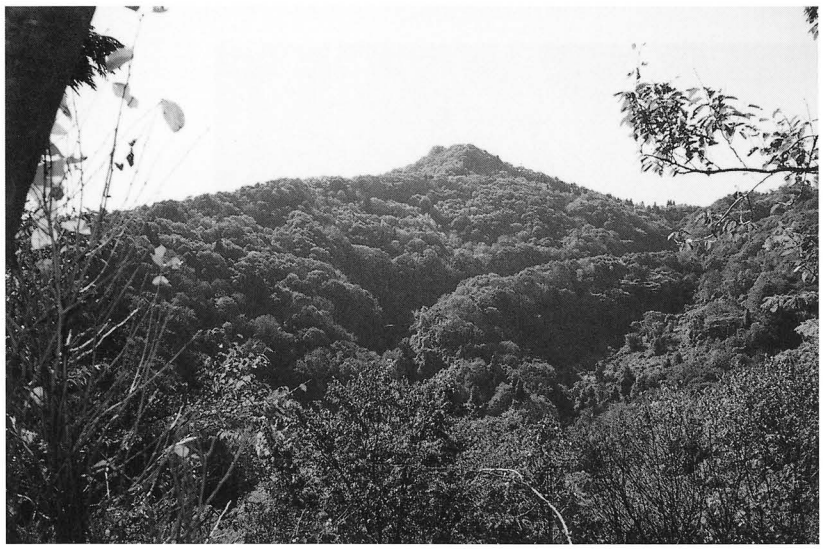

写真７　二上山城主要部（北東より二上山の山頂部を望む）

して拠点化した「二上城」・「二上要害」もこの二上山の山頂部とみることができる。

しかし、次に神保氏を再興した長職の時期（天文年間以降）になると、前述のように天文二十三年（一五五四）初めて「守山城」の城名が現われ、その後の神保氏張期を経て前田利長期まで、一貫して「守山城」の城名が使用されることに留意しなければならない。こうした史料上での変遷を見ていくなら、現在、西の支峰にある（いわゆる）「守山城」跡は神保長職期に本格的に築城され、以後、慶長三年七月以前に廃城となるまで使用・改修が続けられた城郭跡であると考えられる。ただし、長職期以前においても西の支峰には出城的な施設が早くより置かれていたとみられ、そこを利用する形で本格的な築城がなされたのであろう。

では、神保長職が城地を一段低い西の支峰に移したのはなぜであろうか？おそらくそれは砺波地方への領域支配の拡大を図る長職が、小矢部川水運と同川左岸の街道の結節点である守山を自らの統制下に置き、砺波地方などの流通を支配しようとしたためであろう。そのためには、二上山塊の奥深い「奥の御前」よりも、小矢部川の水運を眼下に見下ろせ、守山の城下集落まで一気に下ることのできる支峰の城山が最適とみなされたのであろう。そしてこの考えは神保氏張・前田利長期に至るまで継承され、利長期の「守山城―守山城下町」というセットに発展したと考えられる。

以上、近年の二上山山頂における城郭遺構の確認に触発される形で、これまで通説であった現守山城跡の南北朝から近世初頭にかけての城地一貫存続説に対し、異論を提起してみた。すなわち、従来の守山城史の中で（1）南北朝期の「師子頭」城と神保慶宗期の「二上城」・「二上要害」が二上山山頂の「奥の御前」に、（2）続く神保長職期から前田利長期の「守山城」が現在の城山にそれぞれ城地があったとする考えである。無論、まだまだ論証は不十分であり、今後とも検討を要するが、本稿が将来の守山城研究に一石を投ずることとなれば幸いである。

Ⅲ「二上山城跡へ御登山道筋の図」をめぐって

―古図に描かれた守山城跡―

一　はじめに

標記の絵図は近世に砺波郡の大滝村（旧福岡町、現在は高岡市）で十村を務めた杉野家に伝わっていたもので、現在は高岡市福岡歴史民俗資料館に所蔵されている。図は南麓から二上山を望んだものであり、山上中央に守山城跡、右端に二上山山頂（いわゆる「奥の御前」）が描かれている。また、麓に守山町や射水神社・慈尊院などを描き、道筋を示す朱線が麓から山上、山上から麓を巡っている。図の大きさは三六・六×四八・三㎝である。

筆者がこの絵図に注目したのは、松倉城、増山城と並び「越中三大山城」の一つと称される、中世以来の守山城跡の主要部がわかりやすく描かれ、各郭の位置や規模を知る手がかりとなったからである。何よりも、この城跡を描いた古図が他にない（写しの存在は別として）ことから、守山城跡の古図としては貴重なものと言える。無論、今後の守山城の調査研究を行う上で欠かすことのできない資料であることは言うまでもない。しかし、本図があまり一般に知られていないせいもあり、これまでは本図の内容や作成の経緯について述べられたことがないようである。本稿では、改めて本図の内容を検討し、その作成の経緯や描かれた守山城跡の構造などについても簡単に述べてみたい。

二　本図作成の経緯

本図は一体どのような目的で作成されたものなのか。そのことを知る手がかりは図の右上に記された標題の「嘉永五年四月五日二上山城跡江御登山御道筋之図」であろう。本図が旧十村家に所蔵されていたことを考慮するなら、まず「御登山」とあることから、当時の高貴な人物の登山、たとえば加賀藩主などの二上山登山に関わることであろうと推測できる。では、この嘉永五年（一八五二）四月頃に加賀藩主などが二上山に登った事実はあるのだろうか。そこで『加賀藩史料』を調べてみると、同藩末篇上巻所収の「官事拙筆」に当時の加賀藩十三代藩主前田斉泰（一八一一～一八八四）が江戸から金沢へ帰る途上の四月五日、確かに二上山を巡見している記事が見出される。よって、この図が前田斉泰の二上山登山のために描かれたものであることがわかる。ちなみに前掲の「官事拙筆」によれば、斉泰の一行約千八百人は三月二十一日に江戸を出発し、越中へ入ったのは四月二日で、海岸等を巡見しながら魚津・東岩瀬を経て四月四日には高岡に宿泊している。そして四月五日の当日、斉泰は朝六半時過ぎに前田利長の菩提寺である瑞龍寺に参詣している。その後、五時過ぎに出立し、二上山などを巡見して佐賀野村で中休みを取り、夕方の七時前に今石動に着き、宿泊。翌四月六日には金沢城に到着している。

このように前田斉泰の二上山登山が明らかになったことからすれば、本図の中で二上山の尾根上に引かれた朱線は斉泰が当日登山した（あるいは予定の）道筋を記したものとみなすことができる。その道筋は南麓の二上村にある射水神社の脇から尾根道をたどって山頂の「本社」（いわゆる「奥の御前」）に上がり、そこから守山城の本丸跡に達している。本丸跡には「仮御腰掛所」と記されていることから、斉泰が休息する場が設営されていたとみられる。道筋はそこから「二丸」・「三丸」跡のそばを通って麓の「守山町」に下りている。この下りのルートは今でも地元で「殿様道」と呼ばれる道であり、かつて前田利長が居城した時期などの大手の登城路だったとみられている。

三　斉泰の二上山登山の目的

では、斉泰がわざわざこの時に二上山へ登った目的は何か。前掲の江戸から金沢帰城までの日程を記した「官事拙筆」によると、四月三日の泊（現朝日町）～新浜村（現入善町）間で「海岸等御巡見」とあることから、幕末の異国船来航に伴う海岸防備の視察にあったとみられる。特にこの日通過した生地（現黒部市）の海岸には、前年の嘉永四年に台場が築かれており、当然斉泰の巡見にもその完成状況の検分が盛り込まれていたはずである。また、二上山の東麓である伏木の台場も同じ嘉永四年に完成していることから、そうした台場施設の完成に合わせ、海岸防備全般にわたる検討が考慮されていたとみられる。確かに二上山山頂や守山城跡の本丸に立てば、東に射水から新川にかけての海岸線、また北に氷見から能登にかけての海岸線を一望することができ、海岸の防備策を検討するには最も適していたに違いない。

四　描かれた守山城跡

問題の守山城跡について見てみよう。まず、城跡主要部は南東側から見た形で描かれている。すでに述べたように、本図によって守山城主要部の郭の配置などがうかがえるのは貴重である。しかし、本図は本来、斉泰の登山のための道筋を記したものであり、守山城跡の細部を描くことを目的としたものではない。このため、描かれているのは斉泰が休息した「本丸」とその下の「二丸」・「三丸」周辺、すなわち主要部分に限られている。なお、主郭である「本丸」を含め、「二丸」・「三丸」の名称は嘉永五年当時の呼び方であり、その郭の名称や配置状況がそのまま戦国期にさかのぼるかどうかは検討を要する。しかし、少なくとも当時伝承されていた近世初頭の前田利長期（天正十三年～慶長三年七月以前）の状況を反映している可能性は高いとみられる。

図では最上部に「本丸」、その下の東海老坂村方向に伸びる（斉泰の下山ルートか）尾根筋に「二丸」・「三丸」が続いている。このうち、「本丸」内部の左端には「水溜」が描かれている。その位置は主郭跡の幅が最も広くなった西端付近であり、平和観音像の建つあたりと考えられる。過去の公園化や平和観音像の建設によってその遺構の存在を確かめる術はなくなったが、ここに城中の水源としての「水溜」が設けられていたことが知られる。日常の用は勿論のこと、万一の際の籠城などに備える施設でもあったろう。将来、何らかの調査によりその構造や規模が解明されることが期待される。

写真８　守山城本丸跡の内部（奥の広い空間に「水溜」が存在した）

さて、本図に描かれた各郭については、それぞれ立・横の長さが記入されている。それによると、「本丸」は立四十間（約七三m）に横十八間（約三三m）、「二丸」は立十八間（約三三m）に横十二間五分（約二二m）、「三丸」は立四拾間（約七三m）に横二十間（約三六m）となっている。この内、「本丸」の長さは近世の古城跡書上類である「越中古城記」や「宝暦十四年（一七六四）射水郡古城跡并名所旧跡等書上申帳」などが記す数値に一致することから、そうした書上類から引用・記載されたものと考えられる。次に本図に描かれた「二丸」・「三丸」の位置を現地の遺構などから推測すると、NTTの無線中継所がある平坦面が「三丸」、その真上の平坦面を「二丸」にあてることができる。すでに述べたように、これらの郭の名称や位置は近世初頭の前田利長期の状況を反映するものと考えられる。

もう一つ、二上山山頂から「本丸」に至る途中に「石段」が描かれている。現在は万葉ラインによって尾根が削られ不明だが、尾根道の急な登りとなる箇所に石段が設けられていたのであろう。

五　おわりに

以上、高岡市福岡歴史民俗資料館所蔵の「二上山城跡へ御登山道筋の図」について作成の経緯や内容について若干の考察を試みた。その結果、本図が嘉永五年四月五日に加賀藩十三代藩主前田斉泰が行った二上山登山のために作成されたこと、そしてその登山の目的が越中の海岸防備策を検討するためのものであったことを明らかにした。それとは別に本稿では、図の中に描かれている守山城跡に注目し、記入されている「本丸」・「二丸」・「三丸」の位置や規模（長さ）から、「二丸」・「三丸」が現在残っている平坦面のどれにあたるかを検討した。もとより城跡全体の中での情報量は少ないが、主郭（「本丸」）を中心とした主要部の縄張（ただし、近世初頭の前田利長期の状況であろう）がうかがえることは貴重である。守山城跡を描いた古図が他にない点を考慮すれば、成果としてはまだ少ないものの、今後の守山城の調査研究にあたり、欠かすことのできない資料として評価できる。

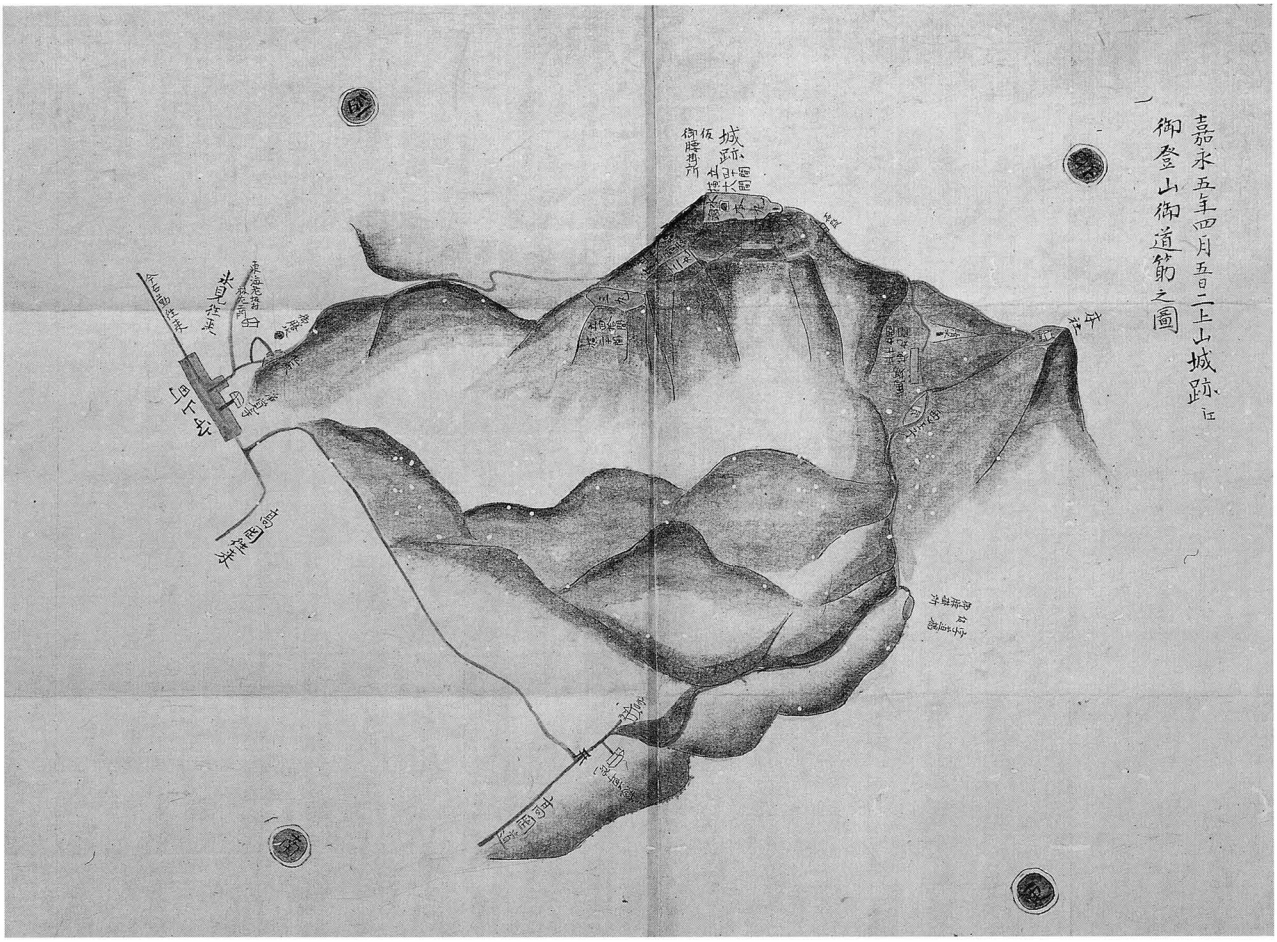

写真９　「二上山城跡へ御登山道筋の図」（高岡市福岡歴史民俗資料館蔵）　※高岡市指定文化財「杉野家文書」

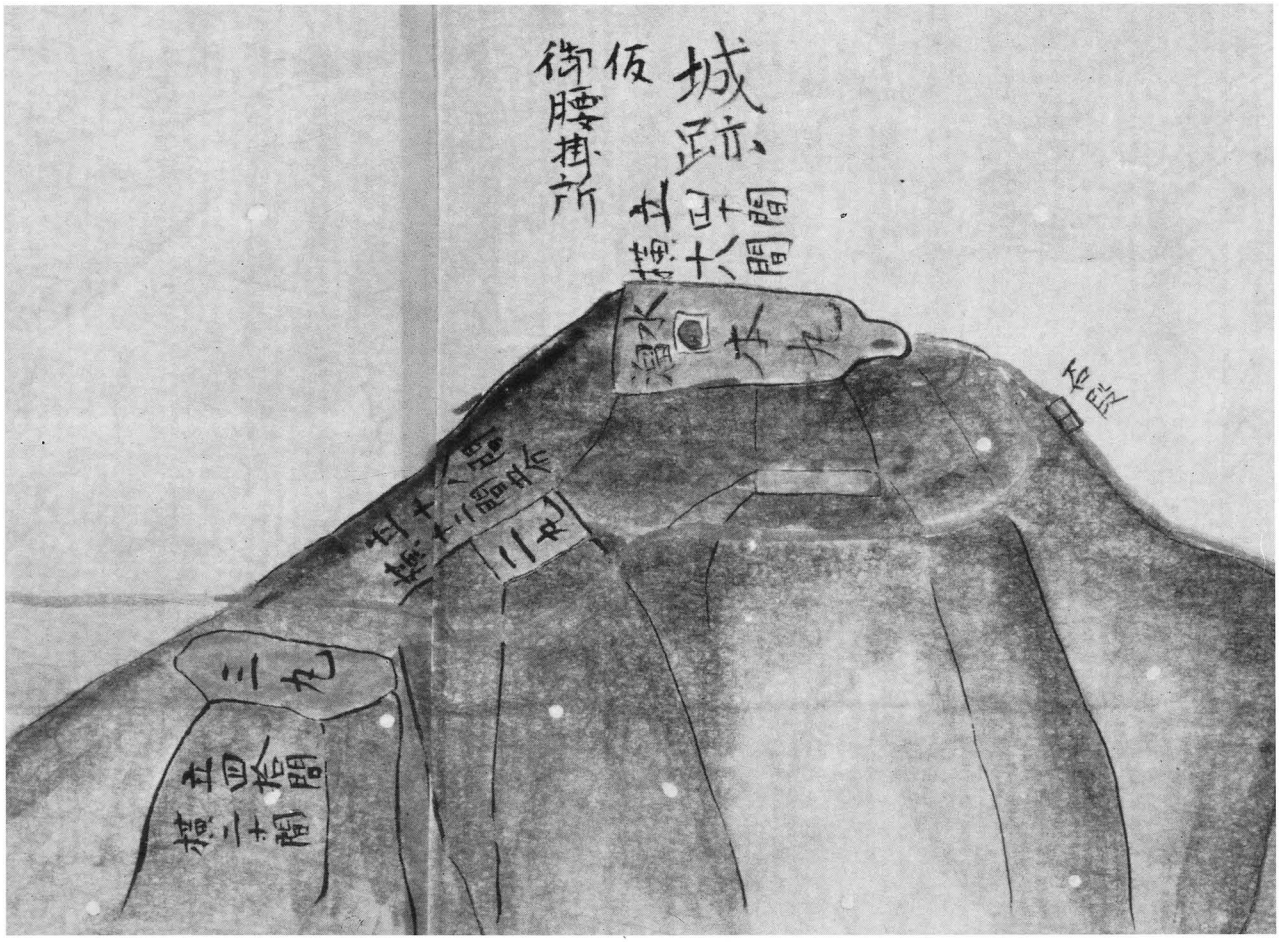

写真１０　同　本丸・二丸・三丸部分

あとがき

守山城は、越中西部における拠点城郭であり、高岡の主要な城館遺跡のひとつです。

魚津市の松倉城、砺波市の増山城と並んで越中三大山城にも数えられるこの城は、県指定史跡として保護されている松倉・増山と異なり、文化財指定を受けないまま現在に至っています。

その理由として、様々な要因が考えられますが、ひとつには守山城に関連する遺構が広範囲に拡がるうえ、長期間にわたる歴史を持っているため、総体的に捉えることが困難であることを挙げることができます。このため、守山城に関して論述した調査報告は散発的なものに留まっているのが現状であり、長期的かつ継続した学術調査に基づいた資料の提示が長く待たれていたところです。

こうした流れを受けて、文化財課では文献史料の収集と考証、現地踏査に基づいた縄張図の作成等による範囲確認調査を進めています。そしてこの調査成果の一部は、『守山城跡範囲確認調査概報』として適宜刊行することで守山城に対する理解を深め、その周知化を図りながら、最終的には報告書としてまとめることを計画しています。

範囲確認調査を進めるにあたっては、富山県内における城館調査の草分けである『日本城郭大系』（一九八〇年、新人物往来社）の富山県版を執筆され、富山県中世城館遺跡総合調査にも携わっておられた高岡徹氏の御協力を得て調査を進めております。この場を借りて厚く御礼を申し上げますとともに、本書によって守山城に対する関心が高まり文化財として保護されることに結びつくことを願います。

平成十九年三月

高岡市教育委員会　文化財課

富山県高岡市
守山城跡範囲確認調査概報Ⅰ

発　行　日　平成19年3月31日
編集・発行　高岡市教育委員会　文化財課
〒933-8601
富山県高岡市広小路7番50号
TEL 0766-20-1463
印　　刷　株式会社　アヤト